

ヨハネの黙示録は、95～96年頃、ローマ皇帝ドミティアヌス帝時代に、皇帝を神として礼拝することが強制され、キリスト者への迫害や弾圧が増えてくるという苦難の中にある小アジアの教会に宛てに書かれた励ましと慰めの手紙です。9節に、あらゆる国の民族の中から集まった数え切れないほどの大群衆が、白い衣を身につけ、手にナツメヤンの枝を持って、神さまとキリストを賛美し、礼拝している幻、光景が記されています。なつめやしの枝は古代から勝利を祝う時や神さまを賛美する時に、使われたと思われます。著者は玉座の前の長老の一人から、その大群衆は小アジアの教会で大きな苦難を通して来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くした者たちであると教えられます。大きな苦難とは、皇帝礼拝を強制され、それに反対、抵抗したために受けた苦難です。12節の賛美は「アーメン」で始まり、「アーメン」で終わっています。これは勝利の象徴なのです。著者は既に勝利したキリスト者の幻を見て、「キリスト者は、この勝利の幻を抱いて苦難の時代に向き合うことができるのだ」、と苦難にあう人たちを励ましているのです。

14～17節が今日の箇所です。小羊の血で服を洗えば、その服は赤く染まるはずですが、ここでは苦難を通して来た人たちが着る衣は、小羊の血で洗ったから白くなったと語られています。小羊とはイエスのことです。白い衣は、当時の理解では天の世界の色でした。イエスの血が衣を白くするとは、イエスの十字架の死による贖いによって、罪を浄められ、衣が洗い流され、白くなった、神のものとされたことと言っています。だからこそ、「あなたたちは神さまから見放された存在ではない。神さまはあなたたちを今も守っておられる」、と語るのです。16節の言葉も、神さまが共に住み、彼らの避け所となって彼らを守ることを意味しています。そして、この世で生きるのに苦労した無数の人々が、救われて天に行って、もはや飢えることも渴くこともない生活を生きることができると語るのです。

ヨハネの黙示録の最初の読者たちは、キリスト教徒であるという理由だけで、弾圧され、迫害され、殺される恐怖に怯えて暮らさなければなりません。まさしくこの世の終わりが来たかのような恐れの中で生きていたのです。著者は、今苦難の只中にある小アジアの教会の人たちに、「あなたたちは大きな苦しみの中にある。でも、恐れることはない、今の苦しみがどれ程のものであっても、小羊であるイエスがあなたたちを救う、イエスの血があなたたちを白く、神のものとしてくださる」と励まし、キリスト教徒であり続けるという苦しい戦いには意味があることを伝えようとしているのです。